

やまびこ 特別号 353 号



リードン

©Tsuchida Yoshiharu



ヨンデール



怖い話でスーッとゾ〜ッと

暑さが増してきた今日この頃、心だけでもスーッと…いや、ゾ〜ッとする幽霊・妖怪・都市伝説…など、怖い話にぴったりの季節になりました。

そもそもなんで夏に怖い話が定番になったの?という、暑いから怖い話でスーッとゾ〜ッと涼しく!は俗説で、夏にある現世でもあの世でも一大イベントとなる“お盆”の存在が大きいようです。

実は移動図書館で小学校や保育園幼稚園に行くと、一番多くリクエストされるのは「怖い本ありますか!」です。どのくらいの怖さでおすすめするのか迷いますが…『怪談えほんシリーズ』が、普段大人向けの怖いお話を書いているような作家さんが参加している絵本シリーズで、本格的に怖いので好評です。子どもたちのリクエストからもわかるように、怖い話はお話の中でもとっても人気のジャンルとなっています。昔でいえば平安時代には今昔物語集に幽霊話などが収録されており、明治時代には『怪談』(小泉八雲/著)が有名どころでしょうか…?平成になると実話怪談集として『新耳袋シリーズ』(木原浩勝・中山市朗/著)が出版され、令和の現在は『変な家』(雨穴/著)や『近畿地方のある場所について』(背筋/著)などモキュメンタリーホラー(※ドキュメンタリーのように見せかけて演出されたフィクション)が流行しています。

そしてここ鶴岡にも、昔から伝わる怖い話がたくさんあります。羽黒山の天狗のお話、庄内藩士が自分の葬列を城下の街中で見かけてしまうお話など、郷土資料館にも幽霊・怪奇話を集めた本がありますので、ぜひ2階の本棚もご覧ください。

様々な怖い本を紹介しましたが、そんなの怖くて一人では読めないよ!という方は、いつも電気がついていて誰かしらがいる図書館をぜひご利用ください。館内を怪談ではなく冷房で涼しくして、ご来館をお待ちしております!

=図書館にある「怖い話」関連本=

- 『妖怪の誕生』廣田龍平(2022)
- 『リング』鈴木光司(1995)
- 『続庄内奇談』畠山弘(1973)
- 『うわさと俗言』常光徹(2016)
- 『黒い家』貴志祐介(1997)
- 『ネットロア』伊藤龍平(2016)
- 『百物語の百怪』東雅夫(2001)
- 『妖しい戦国』東郷隆(2020)
- 『ぼぎわんが、来る』澤村伊智(2015)
- 『鬼談百景』小野不由美(2012)
- 『をんごく』北沢旬(2023)
- 『盛り塩のある家』福澤徹三(2012)
- 『ノンフィクション作家だってお化けは怖い』工藤美代子(2015)
- 『山形怪談』黒木あるじ(2023)

=今月の誕生鳥=



ワシ



タカ科で比較的大きいものをワシ、小さめのものをタカと呼ぶ慣習がある。力強い見た目から、国章や紋章などのモチーフにされることが多い。

～ワシの出てくるお話～

・『おじいちゃんのねがいごと』

パトリシア・マクラ克蘭/絵 クリス・シーバン/文

令和6年7月1日発行

鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館

〒997-0036

鶴岡市家中新町 14-7

(図)TEL:25-2525 (郷)TEL:25-5014

FAX:25-2526

図書館からのお知らせ

～図書館新館構想に向けた活動を行います!～

図書館新館建設に向けて様々な方にお話を伺う機会を持ちたく、藤島・羽黒・櫛引・朝日・温海の各地域をはじめ、各所でワークショップを開催します。

新しい図書館で何をしたいか、どう活用したいか、どう関わっていききたいか…などをお聞かせいただければと思います!

ワークショップやイベントの最新情報・申し込み方法等は、図書館ホームページをご覧ください。



(図書館ホームページ QR コード)

新館構想関連イベント以外にも、夏に向けて子供向け講座やおはなし会、新刊情報等随時更新中です。ぜひご覧ください!

手づくり絵本・紙芝居コンクール 作品募集

～世界にたったひとつだけの、自分の絵本・紙芝居を作ろう!～

鶴岡市に住んでいる方ならどなたでも応募できます。
個人はもちろん、家族・お友達同士で一緒に作ってもOK!
皆さんからのご応募、お待ちしております。

応募期間 令和6年7月24日～8月28日

応募規格 絵本：形式・材料は自由。本文が8ページ以上で本の形になっているもの

紙芝居：8場面以上で紙芝居の形になっているもの
チラシについている応募票に必要事項を記入のうえ、
作品と一緒に図書館本館へお持ちください。



安政年間の深瀬清三郎と池田駒城

深瀬清三郎と池田駒城といえば、慶応二年（1866）11月に事が発覚した「大山庄太夫一件」に連座した人物として知られているが、最近読んだ史料の中に、安政年間における2人の動向が記されていたので紹介したい。

まずは深瀬清三郎だが、嘉永2年（1849）の「小分限帳」によれば、「並御徒」として名前があり、六両三人扶持を給されている。「御徒」とは、『莊内史要覧』によれば、「藩主の行列の先導を勤める」とあり、さらに『国史大辞典』では「騎乗を許されない徒歩の軽格の武士」とあるように、一般的には歩卒のことを指す。これ故か、江戸市中取締の際には「御徒組」として、20人で1組の単位として江戸を巡回しており、緊急時には戦闘員として動員されるようになっていたようだ。

しかしながら、深瀬の場合は少し事情が違って、「小分限帳」では、「酒井大膳殿付御知行取御鷹匠格」と註が付されており、且つその部分に取消線が引かれている。ここにある酒井大膳であるが、酒井家の分家の旗本であり、深瀬は「御徒」という身分でありながら、庄内藩から用人という立場で派遣されていた。おそらく、その才覚が人事担当者にも知られていたのだろう。また、用人の立場にあった頃は、扶持米を合せて十石前後の支給があったことになる。なお、酒井大膳家の屋敷は、下谷の七軒町にあり、庄内藩の下屋敷の近所だったことになる。

さて、この深瀬であるが、「大山酒江戸廻願立二付日記」という意外な史料に登場することになる。安政年間になると、大山酒は重要な販売市場だった松前や新潟に他国の酒が進出したことにより販路が圧迫されていたこともあり、酒屋連中は江戸での販売を画策することになる。その頃、大山村に定期的に訪れていた国学者鈴木重胤は門外漢でありながら、酒屋連中から頼まれその斡旋を引き受けることになり、実際、幕府に対し、同3年（1856）9月に大山酒の江戸売り捌きの許可願を提出することになる。詳細は省略するが、翌年4月に大山酒屋連中は加茂湊から船2艘を仕立てて江戸に向かわせたが、実のところ、幕府から大山酒の江戸廻酒の許可は下りていないことが判明し、船は到着したものの、約2200樽の処置に困り果てることになる。この「日記」には、当時大山の酒屋たちから代表して江戸に来ていた羽根田与次兵衛・桜井伊左衛門・羽田弥助の混迷ぶりが詳細に書かれているが、それでも彼らはたくましく、ツテというツテを当たって辿り着いたのが、旗本の酒井大膳であった。そして、用人の深瀬清三郎が奔走し、割に合わない格安値段であったが、大膳の旗本領などで江戸に送った酒樽すべてを売り捌くこととなる。こういった手腕からも、深瀬の有能さがうかがえるだろう。

次に池田駒城（本名は讓輔）についてだが、何故か下関の廻船問屋を営んでいた白石正一郎の日記に登場している（『白石家文書』（下関教育委員会 1968年）。白石は勤王の商人であり、坂本龍馬をはじめ、下関に滞在する志士たちを庇護していたことで知られており、あの有名な奇兵隊も白石邸で結成された。該当部分を列挙すると以下の通りとなる。

（安政五年）九月二十二日 さつ（薩）の阿久根宿に出羽庄内藩池田讓輔と云者へ相対す、

七八ヶ年前ヨリ出国、諸々遊歴いたし候由申居候、儒家也、三十三四歳、肥肉、人品よろし、

『庄内人名辞典』によれば、駒城は足軽の池田長三郎の家に生まれ、安政年間に絵を学ぶために、長崎に遊学していたとある。そもそも庄内藩では、藩士が諸国を遊歴する事例はあまり聞かないが、足軽をはじめとする御級人の藩士たちは致道館への入学資格がないので、優秀な人材は国を出て学ぶことになっていた。つまり、庄内藩の人材は致道館教育だけで供給されたわけではないのである。

ところで、この記述から白石よりも先に駒城は薩摩に入国したように見受けられる。薩摩は他藩の人間を受け入れないことで知られているが、駒城は薩摩に入国していた初めての庄内人ということになる。このように、駒城は諸国遊歴において、恐らく多くの志士たちと交際したものと思われる。初めて出会った白石からも「人品よろし」と評されていることから、駒城は魅力的な人物だったのだろう。とはいえ、わざわざ「肥肉」なんて書かれて、気の毒だなあと、つい同情したくなる。



7月の新着図書



リクエスト・予約開始は 7月12日(金) です

◎小説・エッセイ

- 言葉の舟(ほしお さなえ)
- ミステリーツアー(青崎 有吾)
- 47都道府県・文学の偉人百科
(森岡 浩)
- 凍空と日だまりと
(あさの あつこ)
- たんぱく質(飴屋 法水)
- 裁判官三淵嘉子の生涯
(伊多波 碧)
- ノイエ・ハイマート(池澤 夏樹)
- 笑う森(荻原 浩)
- 町なか番外地(小野寺 史宜)
- 愚か者の石(河崎 秋子)
- 愚道一休(木下 昌輝)
- オパール炎(桐野 夏生)
- 惣十郎浮世始末(木内 昇)
- 黄昏のために(北方 謙三)
- 一番の恋人(君嶋 彼方)
- 沙を噛め、肺魚(鯨井 あめ)
- 谷から来た女(桜木 紫乃)
- 控えよ小十郎(佐藤 巖太郎)
- 鳥と港(佐原 ひかり)
- 天に挑む(佐々木 功)
- 六色の蛹(櫻田 智也)
- 時ひらく(辻村 深月)
- ルーマーズ俗(堂場 瞬一)
- 最後の甲賀忍者(土橋 章宏)
- ドクター・デスの再臨
(中山 七里)
- 二周目の恋(一穂 ミチ)
- Across the Universe
(秦 建日子)
- 歌人探偵定家(羽生 飛鳥)
- 復活(久間 十義)
- マリリン・トールド・ミー
(山内 マリコ)

◎実用書

- よくわかる世界のサイバー犯罪
(御池 鮎樹)
- 読んでばっか(江國 香織)
- 13歳からの自分の心を守る
練習(谷本 恵美)
- 老いた今だから(丹羽 宇一郎)
- 93歳、支えあって生きていく。
(細井 恵美子)
- 対立の世界史図鑑
(かみゆ歴史編集部)
- 平安京の生と死(五島 邦治)
- 池上彰と学ぶロシア・
ウクライナの歴史地図(池上 彰)
- 迷いのない人生なんて
(共同通信社)
- 世界史の中の戦後思想
(三宅 芳夫)
- 名言・失言の近現代史
(村瀬 信一)
- 「何回説明しても伝わらない」は
なぜ起こるのか？(今井 むつみ)
- ルポ低賃金(東海林 智)
- 寄り添う言葉(永田 和宏)
- 60歳すぎたらひとりを愉しむ
100のこと
- 当事者は嘘をつく(小松原織香)
- ウイルスは「動く遺伝子」
(中村 桂子)
- ライチョウ、翔んだ。(近藤 幸夫)
- ラッコのすべて(南幅 俊輔)
- 最強に面白い人体
取扱説明書編(坂井 建雄)
- 「頭がいい」とはどういうことか
(毛内 拡)

◎児童書

- いつかあなたに
出会ってほしい本(田村 文)
- おとうとのねじまきパン
(高橋 うらら)
- 刑の重さは何で決まるのか
(高橋 則夫)
- 月に移住！？宇宙開発物語
(荒船 良孝)
- いっしょに翻訳してみない？
(越前 敏弥)
- サーファークール(麻生 かづこ)
- ふろふき大根のゆうべ
(安房 直子)
- 魔女学校のグービッド
(石崎 洋司)
- ◎絵本
- こころこころ(新井 洋行)
- おおきなムクムク
(マルタ・アルテス)
- じゅんぱんじゅんぱん
じゅんぱんですよ(accototo)
- れっしゃがとおります
(岡本 雄司)
- いないいないぞう！(大塚 健太)
- かごそとのぴーぽっぽ(小亀たく)
- あかいとり(小春 久一郎)
- おいしいぱんぱんでんしゃ
(五味 ヒロミ)
- もし、世界にわたしが
いなかったら(ビクター・サントス)
- ぼくたちはまっているんだ
(しばなお)
- いてもたっても(たけがみ たえ)
- なんのサンドイッチ？
(たなか ひかる)
- はるなつあきふゆクロとシロ
(竹山 美奈子)
- ようかいむらのここほれ
しおひがり(たかい よしかず)
- とこやのザリガニータ
(タツミ カオ)

やまびこ号の次回巡回日は

月 日です

新着図書は上記以外にもありますので、お気軽にお声がけください。

新刊は、ホームページでもご覧いただけます
<http://lib.city.tsuruoka.yamagata.jp/>